
ひとなつ

しんどうみずき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひとつなつ

【Nコード】

N1760I

【作者名】

しんどうみずき

【あらすじ】

「君の運命の相手は67歳のおばあちゃん」突然現れた自称恋のキューピッドはそういった。高校一年生、はやりの草食系男子の恋物語。いったいどうなる!?

プロローグ

あれは、ちょうど夏休みに入った時のことだった。

いつまでもダラダラと続いてきた長い梅雨がようやく明けて、夏空を覆うセミたちの勢い

も徐々に増えつつある時期だ。通信簿のことはすっかり忘れて、さて夏休みの宿題を

どう片付けようと考えていたころ、おれは特にしたいこともなく、だらだらと

暇を持て余していた。

宿題は七月中に終わらせるのがセオリーだが、どうにもやる気が起きない。

一学期分の疲れを洗い落とすのが先決だということだろうか。

……ただ単にはてているだけかもしれないけど。

「あーあ」と呟いてみる。

つまんねえな。

そういえばもうすぐ甲子園がテレビで放送されるはずだ。

帰宅部のおれにとつて、彼らの汗はとてもまぶしい。

やればできる、なんて思っているけど努力するのも才能なんだって最近気づいた。

何かに一生懸命になったこと、今まであっただろうか。

……ないんだろうな。悲しいことに。

これといって誇れるようなことが、一つもない。自叙伝を書いたらひどくつまらなくなる

だろう。大きな出来事も、打ち込んだことも、涙を流したことも。

あーあ、つまらない人生。

そんなことをぼんやりと考えていると、窓からさしていた陽光が弱まったのを感じた。

薄眼を開けて確認してみる。大きな入道雲がぼっかりと太陽を隠し

ていた。

今日も夕立だろうか。

雨はいい。ベットに寝そべりながら聞く、地面を雫がたたいていく音が心地いいのだ。

いつの間にかうとうととしてしまうような、子守唄にも似た安心感がおれを包み込んでくれる。

乾いた心にも潤いを与えているのかもしれない。

「そうだよ。雨はなんだって洗い流してくれる。ノアの方舟の時のように、ね」

「ん、ああ」

「……そんなに眠いのかい？」

おれの顔にかかる影が濃くなったような気がした。重いまぶたを静かに開く。

「誰だ おまえ」

目の前で手を振るのはやめる。うざったい。

「いや、普通見も知らぬ人が突然現れたら驚くものだと思うんだけどなあ……」

おれはあくびをしながら上半身を起こした。

「充分びっくりだ。寝ぼけてるせいか、てめえの顔がのんびりしているせいか危機感はあるか」

「覚えねえけどな」

「ま、そのほうが好都合。でも一つ覚えておいた方がいいよ。人はみかけによらない」

「しるか」

どうして初対面のやつに忠告されなきゃいけないんだ。

「というか誰だよ」

「ドロボウ」

「警察呼んでいいか？」

「さて問題です。その場合、何番にかければいいでしょうか」

「えーと……」

そういやすぐには出てこない。

これじゃ襲われた時に大変だ。

「110番か」

「正解。でもそんなに遅くちゃ、殺されちゃうかもよ?」

手を銃の形にして見せて、ぱんと撃つ。

敵が銃持っていたら電話してる暇ないだろうが。

そんな取りとめもない突っ込みは心にしまっておいて、おれは眼前でここにこ微笑んでいる

少年のような顔つきの人をながめた。

第一印象が肝心だという話はよく耳にするが、こいつはまったく敵意を感じさせない。

この童顔は、笑うというほかに表情を作れるのだろうか。

顔の筋肉すべてが誰かを安心させるために作られている、そんな気がするほどだった。

「で、何のようだ。おれもそろそろしびれを切らすころだぞ」

「君はそんな人じゃないことはよく知ってるよ、優貴くん」

ほう、おれの名前をご存知ですか。

「ますます気になるな。何者だ、あんた」

「自己紹介する時はいつも困るんだよね　どうにも照れくさくて」

「いいから話せ」

彼は鼻の下を掻きながら言った。

「恋のキューピッド、かな」

「残念ながら今はほしくありません、お引き取りください」

毛布にくるまって寝ようとするおれを、自称キューピッドがあわてて止めた。

「だから嫌なんだよ。いつも笑われるか馬鹿にされるか」

「うるせえ。なんなら裸になるか、弓でも持つてる。そうでなきゃ信じられるか」

「そんなこと言わないでよ。裸体の少年がベッドにいきなり登場し

たら、

何されるかわからないんだからさ」

「いろんな意味でな」

おれはもう一度体を起こすと、そいつをマジマジと観察した。

緑一色のTシャツに、ジーパンをはいている。ベルトは締めていないようだった。

身長は目分量だが　大体、165センチといったところか。

ちよつとカールのかかった黒髪が柔らかな表情をひき立てている。

街に出たら、

弟キャラとして人気を集めそうだ。「かわいいー！」という黄色い

声の集まる光景が

安易に想像できる。

「なんでキューピッドさんがこんな現代的な服装なんだ？」

「浴衣とかでもいいんだけどさ、この方がなじみやすいかと思って」

そう言つて、柄のないシャツをパタパタと引つ張つて見せる。

たしかに筋は通っている　ような気もする。

「だったらもう少し穩便に現れたらどうなんだ？　せめて玄関から

入るとか」

「いいじゃないか。面倒くさいことはきらいなんだ」

彼はどこまでも同じ色の青空をちらりと見ると、おれを振り返つた。

「夏だよ」

嬉しそうに言うやつだ。

「知ってる」

「なにかしようよ。せつかくの夏なんだからさ」

「夏だろうと冬だろうと関係ないだろ。夏は暑い、それだけだ」

「ちゅちゅちゅ」

人差し指をちよこちよこ横に振る。片目をつぶっているあたりが
キザなつもりなのだろう。

似合っていないかった。

「僕が誰だか考えてみなよ」

「……恋愛でもしろってか？」

「そういうこと。物分かりがいい子はモテるよ」

そんなことだけでモテるといふのなら、おれはどこまでも物分かりのいい人になってやるうじゃないか。

「本当だよ。少なくとも流れの読めない人は嫌われる」

エンジェルの丸っこい瞳がおれを覗き込む。足跡ひとつない真っ白なゲレンデのように
すべすべした肌だった。

「僕が言うんだから間違いないさ」

「言っておくが、おれはまだお前が恋のキューピッドだなんて
いうくだらない話

を信じたわけじゃないからな。ただ変な奴だくらいの認識しかして
ない」

「……むう。やっぱりさっきの言葉取り消し。バレンタインデーな
んてなくなってしまう

えばいいと思っっているでしょ」

「バレンタインは命日だ。いちゃいちゃするのは不謹慎というもん
だぜ」

「したくてもできないくせに」

「うるさい」

枕をつかんで威嚇の意を示す。彼はやれやれと肩をすくめるだけで、
逃げようともしなかった。

「そんな君に提案なんだ。恋しない？」

「し・な・い」

「どうしてだよ。本当に楽しい美しいことなんだよ、誰かに恋す
るっていうことは」

「興味無いね。大体、高一で恋したって、あっという間に終焉を迎
えるのは目に見えるよう

なもんだろ。いくつものカップルができては別れたのをおれは知っ
てるぞ」

キユーピッドは首を振ると、なにもない天井を見上げた。

悲しそうな笑み。

「残念だけど、あれはただの遊びでしかないんだ。僕が言っているのは、そんな生ぬるいものじゃない。」

何時間も携帯電話を握りしめてメールを待ったり、会いたくて会いたくて眠れない夜

を過ごしたり、一緒にいるときにこれ以上ない幸せを感じることができる　そんな

真剣な恋なんだよ。まるで、命を燃やすような、ね」

「そりゃ楽しそうだ」

棒読み口調で答える。少年は大げさにため息をついた。

「まだ魅力を理解していないだけなんだろうけどさ……それにしても、興味無いね。」

「これがいわゆる草食系ってやつ？」

「一応そのつもりだ。友達でいる方が楽に決まってるだろ。下手に告白でもして

気まづくなるよりずっとまし」

「　ああ！」

我、発見せり！　とでも叫びだしそうなくらい晴れやかな表情で膝を打つと、

彼は一気に相好を崩した。

「そうかそうかと肩を叩いてくる。」

「いい出会いがなかったただだよ、運命的な偶然なんてそうあることじゃない。」

それなら仕方ないよね。わからなくて当然だよ。よしよし、僕がい人を紹介してあげる

から大船に乗ったつもりでいなさい」

薄っぺらい胸板をどんと鳴らす。情けない音しか聞こえなかった。

「これなら僕の存在も証明できるし、一石二鳥だよね」
一人で勝手にうなずく。おれはそろそろ飽きてきていた。
寝起きのせいかな、こいつのテンションについていけない。恋愛なん
てドラマの中での
話だという感覚しかないおれにとって、出会いがどうだとか言われ
てもまったく実感
がわからないのだ。
たくさん偉人達が結婚を揶揄する名言を残していったように、恋
なんて

結局は勘違いなのだ。気の迷いでしかない。

「さ、そろそろ出て行ってくれないか。これが夢だとそろそろ実感
したい」

「ちよつと待っていなよ。僕がすぐに、素晴らしい人を見つけてき
てあげるからさ」

自称キューピッドは開け放たれた窓から飛び降りると　　そういや、
いつのまにか

網戸が開いている　　そのまま姿を消してしまった。

ベッドから伝わるぬくもりが眠れぬむれと誘ってくる。

霧がかかったようにもやもやする頭を枕に乗せると、すぐに睡魔が
おれを取り巻いていった。

悪魔がいるんだから、天使もいてもいいかな、なんてどうでもいい
考えがうつすらと浮かんだけど、

おれはすぐに眠りに落ちて行つた。

ふと目覚めたときには夕暮れだった。

日暮らしの鳴く声が切なく耳に届く。なぜ彼らは夕時にしか鳴かな
いのだろうか。

短い夜の訪れを告げようとしているのか、朝を知らせるめんどりの
ように。

ふああ、と声にならない音を発しながら伸びをする。ついつい昼寝をしてしまった。

今晩は寝るのが遅くなりそうだ。体も動かしていないのに寝てばかりいるんじゃない。

健康にいいはずがない。明日はプールにでも行こうかと思ったが、きつと面倒くさく

なってやめるんだろうな。時は考えを捻じ曲げる。

……そういえば、夢を見ていた気がする。

恋のキューピッドとか言ってたっけな。おれの深層心理もよくわからないものだ。

そういう類のことには興味ない振りをしておきながら、心の奥底で恋愛をしたいなんて

考えている のかもしれない。

変な夢だったな。悪夢、とは言えないようなほのぼのした幻だったけど。

小さいくせに大人の恋を語りやがる。

どう見てもおれより年下だろうに。何がわかるというんだ。

そんな幻想は社会人になって、それでいて幾重にも入り組んだ偶然の果てに

巡り合えたなら認めてやろう。一生添い遂げたいと願っているのは結婚する前だけ

だというのが大半なのに。

その証拠に離婚が絶えない。勘違いの先に見えたのは、絶望なのだろう。

「やあ」

頭痛がした。

振り向くのが嫌になった。鮮明に覚えている声だ。

見かけそのままに少年のものだ。

「これって永遠に覚めない夢とか、そういう感じのやつなのか？」

「何を言ってるんだい。僕は現実だよ」

「……おれは触れるものでも信じたくないな」

仕方なく、声の主を振り返る。

相変わらず緑のシャツに真新しいジーンズだった。ただ一つ違っていたのは、

彼がその小さな手の上にかわいらしい小瓶を携えていることだ。

別れ際に言い残していったことを思い出す。

「で？ 運命の人は見つかったのか」

「67歳のおばあちゃんだけだね」

空手も合気道も経験したことのないおれでも、こんな鋭いけりが繰り出せるのだと素直に感心

するくらい会心の一撃だった。

わき腹に重たい蹴りが入ったようで、げほげほとむせこんでいる。

「ざけんじゃねえ！ 半世紀も違う年齢のばああと恋なんてできるものか！」

「愛は年齢も超えるってね ウソ、冗談だよ」

手をひらひら振りながら訂正する。おれはもう一発のげんこつをキューピッドの頭に

浴びせかけた。

あわてて頭を庇うものの、怒りをまとった拳は防御を貫通して伝わった。

涙目になりながら恨みがましい視線を投げつけてくる。

「そんなに怒らなくてもいいじゃんよお……」

「マジで信じかけたおれの気持ちを察してみる。これから一生、誰も信じられなく

なるところだったぞ。今でも鳥肌が静まらない。こっぴつのがトラウマになるんだろっぜ」

いつの間にか鼻息が荒くなっている。

危ないあぶない。自分を制御できなくなるところだった。

おれは感情が高ぶると狼に変身してしまうという特異な体質で

「んなわけあるか！」

「なに！？いきなり突っ込まないでくれない！？」

自称キューピッドはつぶらな瞳をまん丸にして叫んだ。

うるさい、そんなに声を出したら母親がやってくるだろうが。

「大丈夫、僕は君以外の人間には見えないようになってるから」

「便利な能力だな。声とかも聞こえないのか？」

「うん。つまりないに等しい存在なんだ。だから心配はしなくていいよ」

「おれは今、何も無い壁に向かってひとりごとを言っているように見えるんだろうな。ちくしょう、変質者じゃねえか。もしくは幻覚の見える病人か」

「どうでもいいよ、そんなこと」

おいおいどうでもいいとはなんだ、どうでもいいとは。

彼は真剣な表情に戻ると、かわいらしいハートマークのついたピンク色の小瓶を差し出した。中世的な顔立ちのせいか違和感はなかった。

手のひらに収まるくらいのサイズで、中には無色の液体が詰められている。ラベルにはハートの絵だけが描かれていて、他の文字はなにも書いていない。

「これ、なんだと思う？」彼が訊いた。

色からして怪しい。それをおれにどう使えというのだ。

「いやな予感しかしないな」

「恋の媚薬、とでも言おうか」

「大体見当は付いてる。それを誰かに飲ませると一目ぼれって奴だろ。あいにくそんなつもりはないからな。強制的な恋愛なんて」

「そんな物騒なものじゃないよ」

キューピッドは微笑んだ。女の子が騒ぎだしそうな可愛さがあった。

「これは君が飲むんだ」

「おれが？」

「そう」

「どうして」

「恋するためだよ。これを飲むとどうしても恋がしたくなる」

「……………」

「なんでそんなにためらうんだよ。若いうちに恋しようよ。」

可愛い彼女とずっといちゃいちゃ出来るんだよ？ 年頃の男の子ならよだれを垂らして飛びつく提案じゃないか」

「確かに魅力的かもしれない。オークションに出したら高値がつくだろうな。もらってやる」

「 そんな不純な理由であげるわけにはいかないよ」

おれは彼の握っている小瓶を見つめた。

これを飲めばやつの言うところの「身を焦がすような恋愛」が出来るらしい。

ただおれには全く想像がつかない。恋愛なんてテレビの中の出来事なのだ。それらは実に美化されていて現実味がない。

恐怖心もあった。無害そうだとはいえ得体のしれない少年が渡すものを信じていいものだろうか。知らない人から物を受け取ってはいけないというのは、小学校の基本である。

「ならいらん」

「ああもう、じれったいなあ」

かれは足をじたばたさせるとおれに投げつけた。

紙一重のところ華麗に避けるはずが、動き出す前に直撃を食らった。…………やるな。

「わかった。そこまで言うなら実体験を見せてあげよう」

「どうやって？」

「今すぐ眠ってもらおう」

おやおや物騒なこと え？

おれに確認できたのは雷のような速さでキューピッドのごぶしが腹にめり込むところまでだった。

いたいと思う間もなく、意識がフェードアウトする。 覚えてい

るよ……………！

プロローグ（後書き）

連載開始……はいいんだけど、更新は不定期になると思います。
どうぞ応援お願いいたします。

第2章

街は人込みであふれていた。

よく晴れた夏の昼下がりに、汗のにじむような炎天下で多くの人は半そでの服を着ていた。

見覚えのある交差点。

通学路の途中にある割と大きめなものだ。大通りに面していて店も多いし、人の数も圧倒的だ。

信号が青に変わると一斉に人の流れが動き出す。

青、緑、白。

色とりどりの洋服が行き交う。

まるでいろんな絵の具をパレットの中に放り込んで、筆でかき混ぜたようだ。

おれは状況をつかみながら道路の隅に立ち尽くしていた。

どうすればいいのか、なぜか頭の中にインプットされているみたいに足が動く。

順序良く並んだ車の列を眺めながら向こう側に渡る。

アスファルトからは熱気が立ち込めて、むき出しになっているふくらはぎを焼いた。

暑い。

排気ガスも人の吐息も、太陽の日差しを包み込んで離さないようにしているかのようだった。

汗がすべて蒸発し、湿気に変わっているのだろうか。じめじめした空気はねっとり肌につきまとう。

冷房の利いた部屋に戻りたいと思った。

だけど無意識のうちに歩みは進んでいて、気がつけばマクドナルドの店前にいた。

腹が減っているわけでもない。何かか飲みたいわけでもない。

「あ、木暮だ！ 珍しいねこんなところで会うなんて」
自動ドアの向こうから出てきたのは、マツクの袋を提げた女の子だった。

シヨートヘアの可愛い子。

「……………誰？」

「……………へ？」

一瞬、気まずい空気が流れる。

おれにはこんな瞳のくりくりしたアイドルのように整った顔立ちの知り合いはいない。

つていうか、身近にいねえよ。

「なんでおれの名前 知ってるんですか？」

「え、あ、その……………同級生だよね？ 高校のB組」

確かにその通り。

あ、もしかしてファンの方ですか。こまるなあ、そういうことは事務所を通してもらわないと。

あははははは！

……………混乱してるな、おれ……………。

いやだつて、目の前にこんな美人がいるんだよ、しかも初対面のはずの。

流れるに知り合いっぽいし。

「もしかして、双子？」

「違うとは思いますが」

「じゃあドツペルゲンガー！？ とかかな？」

言ってから後悔したみたいだ。

はにかみながら照れ隠しに頬をかくところとか、かわいすぎますってもう。

全部写真に収めてしまいたいくらい。

「下の名前って、ユウキで合ってる？」

「優しいに貴族の貴で、優貴です」

ユウキって名前はなんでこんなに多いんだろうな。

公園で名前を呼ばれたと思って返事したら、全然違う人がびっくりしていたりする。

あ……間違えました、すみません。

みたいな感じで泣きそうになったことがたくさんある。

「だよねえ　ねえ、どこかで頭を打つたりした？　記憶喪失をした覚えとかは？」

「ない、はず」

「質問1、担任の先生は誰？」

「大石先生」

「質問2、学級委員は何人？」

「誰もいない」

どうにも立候補者が出なくて、だったらなしでいいと大石に怒られたのが原因だ。

実は先輩から去年も同じことがあったと聞いていて、みんなで示し合わせて仕組んだものだ。

うひゃひゃ、おぬしも悪よのお越後屋。

いえいえお代官様ほどではありませんせぬ。

なんてことをやっていたわけだ。

その中に、彼女はいなかった……と思う。

「質問3、私の名前は？」

「……ごめんなさい」

「もしかして、からかってるわけじゃないよね」

「けっしてそんなことは」

ないはず。

けど、確信が全くなかった。

むしろ向こうが嘘をついているのではないだろうか。

……いえ嘘です。

こんなに純真そうな娘が真顔で偽りを述べるわけがないのだ。

ああ、神よこの馬鹿な私をお許しください。

「だとしたら、やつぱり……記憶喪失？」

「きおく、そうしつ」

ああもうそんな感じにふるまおうか。

どうでもよくなってきた。

「そういえばさつき頭を強く打ちつけたような気がしてきました」

「えーっどうしよう!？」

おろおろする姿もまたかわいらしい。

アイドルグループに入っても遜色ないだろう。

「わっ!」

何をされるのかと思ったら、頭を入念に調べられた。

その結果、当たり前だが外傷は認められなかったそうだ。これでは

医者にかかることもできない。

手があったかくて、柔らかくて、もう天国みたいな心地でしたあ。

「……まいったなあ」

心底困ったような顔でうんうん唸っている。

こっちは何も困っちゃいないんですけどね。むしろ幸せです。

「自分の家の場所はわかる？」

「いや、分からないです」

「電話番号も？」

「ぜんぜん」

「携帯電話は持ってない？」

「たぶん」

「あちゃー……」

こうなりゃもうやけだ。どうにでもなれ。

まずい展開になったら記憶を取り戻したことにして逃げだせばいい。

それにもう少し　といわず永遠にでもこの娘と一緒にいたかった。「しょうがない。一回私の家に戻って、連絡網を探して送り届けるしかないか。」

ここで会ったのも何かの縁、私が最後までしつかり面倒をみるからね。木暮はゆっくりしていいよ」「

みかけによらず、案外しつかりした性格のようだ。

すみません、全身を任せてお世話になります。

「でもここに置いておくのも不安だしなあ　私の家まで一緒に来てくれる?」

こちらからお願いたいくらいです。

部屋とか入れたりしたらもう悪魔と契約してもいいです。

「じゃあ、ついてきてね!」

天真爛漫な笑顔でおれをノックアウトすると、彼女はマックを後にした。

「そういえば、名前がわからないんですけど……」

「あ、ごめんね、気付かなかった。園崎礼美っていいいます。改めてよろしくね」

そのざきれみ、麗しい名前です。

園崎嬢のお宅は普通の一軒家だった。

青い屋根意外に特筆するようなこともない、平凡な家だ。

「こんなところだけど、ゆっくりしていいね」

どうやら「両親は留守のようだった。」

マックにいたのはお昼を買ったためだろう。

なんだか良い香りのする彼女の部屋に通されて「よし、悪魔でもなんでも出てこいや!」、おれはお茶とお菓子まで出されて恐縮だった。

たまたま遭遇しただけの記憶喪失患者にここまで優しくしてくれるとは……。

感謝感激！ 日本も捨てたものじゃないな。

しばらく楽園のような空間を横臥した後、園崎嬢が浮かぬ表情で戻ってきた。

「ごめんね 木暮の親はいないみたい……」

いえいえ、謝るのはこちらですとも。

ほんとにもう、いろんな意味ですみません。そしてごちそうさま。その時、どこからかぐうううという儂げな音が聞こえてきた。

園崎嬢は顔をリンゴのように真っ赤にしながら、

「おなかすいちゃって……食べてもいい？」と訊いた。

ぜひともランチにご一緒させてくださいまし。

その照れた顔もまたスバラしいです。

マツクの袋からハンバーガーとポテト、そしてドリンクを取り出す。マスカット味のクーだった。

「ポテト食べる？」

エスサイズで量も少ないというのに、健気にもポテトを笑顔で差し出してくれた。

最上の感謝を送りながら、おれはいただくことにする。

その瞬間、ちよつとだけ手が触れ合った。

びくつ、と園崎嬢が手を引っ込める。またもや顔が真っ赤に上気していた。

「あ、ご、ごめん」

「ううん。いいの」

何かを切実に訴えかけるような瞳で、彼女はおれを見つめた。ドキドキしちやいます。

「あ、その、えーとね……」

手をもじもじさせながら言葉を紡ぐ。なんでもおっしやっってください。力の限りのことは致します。

「だから、……もうちよつと、ポテト食べて、ね」

言われるがまま、おれがゆっくりと手を伸ばすと、今度は園崎嬢の

可憐な手が偶然ではなくおれに重なった。

「え……？」

「だめ、動かないで……。もうちょっと、こうしていたいから」
耳が真つ赤になっていくのが感じられた。

心臓もこれ以上経験したことがないくらい激しく鼓動を刻んでいる。
人生で、一番緊張しています、確実に！

それから見目麗しき彼女はゆっくりと目をつむった。
え、これってまさか……。

「お願い」

キスして。

「はいおしまい」

唇を近付けたはずの場所には、憎らしげな顔があった。

徐々に記憶が戻ってくる。

てめえ……。

「いい夢だったでしょ、ねえ」

うるせえ、うるせえ！ なんだあれは、マジで夢なのか！？

「あたりまえだよ。あんなご都合主義な話、少女マンガにだって出
てくるもんか」

「やられた……」

自分が猛烈に情けなくなってくる。

要はこいつの手のひらの上でいいように踊らされたわけだ。

「ほら、恋愛したくなっただでしょ？」

「黙れ黙れ黙れ、おれの平穩のためにも黙れえっ！」

「まあまあ、そんな大声出さないで。聞こえちゃうよ」

悪魔のようなキューピッドは、ピンク色の小瓶をおれの目の前でち
らつかせた。

「これを飲めば、さっきのような夢が現実になるかもしれないよ？」

「……………」

実を言うと、かなり心が揺れ動いていた。

悔しいが先ほどの夢の効果は絶大だったのだ。あのキスの先には何が待っていたことか……ああ。

「わかった、もらってやる」

「よしよし」

かれは嬉しそうに笑うと、また明日来るよ、といった。

「じゃあね」

窓から去ろうとする後ろ姿におれは声をかけた。

「なあ、これっていつ飲めばいいんだ？」

「明日の朝食のときにも。きつとおいしいからさ」

羽もないのに、外へ飛び去って行った。

気付けばあたりはもう真っ暗で、夕食だと呼ぶ母の声がつつすらと聞こえた。

第2章（後書き）

書いてて自分でも笑っちゃうくらい、ベタでした。
園崎嬢、ごちそうさまです。

モテモテの予感

……もう一度、あの夢が見たかった。

キスの続きでなくてもいい、マックで出会うところからでもいいのだ。園崎嬢の天使のような微笑み。

つかみどころがないけど根はしっかりしている性格。

よく似合うシヨートヘア。

すべてが愛おしく懐かしかった。

まさに夢のような話ではあったけれど、味わったことのない幸せを感じていたのだ。

醒めた後でかみしめるほど切なくなっただベッドの中でじたばたするしかない。

はやく朝が来ればいい、出来れば春を連れてきてくれると嬉しい。

完全にあのキューピッドの策略にはまっているな。

恋煩いに医療保険は効くのだろうか？

いつの間にか朝日が昇っていて、目ざましのうるさいベルでおれは目覚めた。

どうやら期待していた夢は訪れなかったらしい。

なんとなくもやもやとした切迫感が体に満ちている。

枕元には昨夜もらったピンクの小瓶が置いてある。

はずかしいことにずっと握りしめていた。……恋に恋している状態。

朝食の席で、おれは迷っていた。

和食好きなおれのリクエストにこたえて、朝のメニューは白米に味噌汁、そして納豆だ。副菜に野菜を少々加えて、完璧な朝ごはんの出来上がり。うまそう。

つと。

それにしてもこいつはどこに入れればいいんだ？

味噌汁か、それとも直接飲むか。

どちらにせよ納豆のタレの代わりに使おうなんて考える阿呆はいないだろう。

親にはれないようにしながらそつと蓋をあけてにおいをかいでみる。リンゴとモモを足して2で割ったようなフルーティな香りだった。

夜にでも近所の木に塗りこんでおけば、翌日にはカブトムシやクワガタがざつくざく。

おれが飲めばかわいい女の子がざつくざく……ってことでいいんだよな。

うむ。

小説かなんかにあるようなハーレム状態になるわけだ。

なにニヤニヤしてるのよ、と母親に怒られる。そりゃ類も緩みますつて、母上。

もしかしたらお嫁さんまで連れてきちゃうかもしれないですよ？

お義母さん、なんて呼ばれちゃうかもしれないですよ？

嫁姑戦争勃発の危機ですよ？

「ずいぶんご機嫌だねえ〜」

「ああ絶好調　うん？」

「おはよう」

「朝からうつとうしいな。その、なんだ、申し訳ないが朝飯ならよそで貰ってくれ」

「そこまで落ちぶれてないよ……」

「それにおれはマヨネーズが嫌いなんだ」

「別にキューピッドは関係ない！」

「だったらなんだ。朝の占いでも見に来たか」

「そうそう。今日のおとめ座の運勢は……って違う！」

「朝のニュースキヤスターが好みか」

「彼女には癒されますう　もうこれくらいでいい？」
「充分だ。よくやった」

今日はおれのペースだ。
調子に乗っていることもあるだろう。
へっ、勢いで人生どうにでもなるんだぜ。

「で、実の目的は飲み方の指南ってところだろ」
「そう。よくわかったね」

「当たり前だ。それ以外に何がある」
おれは憤慨した。

「こんなもの一気に流し込めばいい話だろう。何を遠慮する必要がある」

簡単すぎるな。

88プラス22くらいに楽勝だ。100だろ？ え？ 違う？
「これはね、リンゴジュースに混ぜないと意味がないんだ」
「どうしてリンゴなんだ？」

「禁断の果実、ということだ。僕らキューピッドは割と好んで使うね」

「禁断んう……大丈夫なのか、それ」
「君がしっかりしていれば問題ない」
「そうか」

「飲んだすぐそばからジュースのように甘い日々が始まるはずだよ」
「母さん！　リンゴジュースをくれ！」
幸いなことに冷蔵庫に入っていた。

コップになみなみとジュースを注ぎ、小瓶の中身を数滴たらす。
なぜだか、いちごミルクのような色に変わったのだが、それはさておき。

「……飲むぞ」

「どっどっぞっ？」

「ほんとに飲んじゃうんだからな」

「いいってば」

ちよつとびびっていたというのもある。

得体のしれない液体を自称キューピッドにもらったのだ。

これ以上に胡散臭いシチュエーションはないだろう。

だが恋愛の誘惑はそんな些細な懸念を吹き飛ばしてしまうくらいにすぐくて。

おれは一息にコップの中身を飲みほした。とびきりうまかった。

彼女とキスしたら、こんな味なんだろうなと思った。

「それをこれから確認するんだろう」

思考を読むな、このやろつ。

「うまいな、これ」

「だから言ったでしょ。おいしいって」

やつは童顔をほころばせて、空になったピンクの小瓶を取り上げた。洗ってまた新しいのを入れるそうだ。

今度は、おれのところに来ることはない。

「……で、なんでついてくるんだよ」

「アフターサービスも僕の仕事だからさ、君の恋愛が成就するまで見届ける」

「おいおい確実じゃないのかよ」

「念のためってこと。一応言っておくけど、必ずしも最初で成功するとは限らないからね」

ふん。モテモテ男子となったおれ様が歩けば、列をなして女どもがついてくるのだろう。

テレビあたりが取材にくるかもしれない。

なっはははは！

玄関を出てすぐのところ、道路の隅っこで高らかに笑っているおれを冷ややかな視線がとらえては逃げていく。

キューピッドがこれ見よがしに大きいため息をついた。

「ばか」

「うるせえ」

余計な御世話だ。

いつもより青く見える空と、応援するような蝉のオーケストラに送り出されて、おれは学校への道に行く。

今年の夏は暑くなりそうだ。

さあ、おれの体温を越えていけ！

そういえばアスファルトのほうが熱いことを思い出した。

じ、地面なんかには負けるものか……！

「ばか」と、呟く声が聞こえた。

モテモテの予感（後書き）

ばか。

調子の乗るなよこの野郎。

これからとびきり甘い展開を用意しているんだから……。

第3章

ピンク色の気持ちは、すべてを救う。

まるで大きな手のように。まるで箱舟のように。まるで母親のように。

危険は、終わってから気づけばいい。

キューピッドに伝わる詩

曲がり角を曲がるたびに、トーストをくわえた少女とぶつからないものかとウキウキしていたのだが残念ながら何もままに学校に到着してしまった。

「……なんでだよ」

「あせらない、あせらない」

校門には制服姿の同級生が集まっていた。

その中に園崎嬢がいないものかと無意識のうちに彼女の姿を探していることに気づいて、おれは目を伏せた。

かわいい子なら、クラスにもいる。

そう自分に言い聞かせても、むなしさが残るばかりだった。

「よお、木暮」

「男には興味ない、あっちへ行ってくれ」

挨拶してきた男子連中をあしらひ、おれは教室に足を踏み入れた。合コンでも開こうか、という冷やかしが後ろから飛んできた。無視。

「なあ、転校生でも来るのか」

おれはどこかのリンゴ好きな死神のようにパタパタと後をつける
キューピッドに尋ねた。

「そうでもないと劇的な変化はないだろう」

「うーん、こればかりは僕にもわからないからなあ」

「無責任なんだな」

「果報は寝て待て、ってね」

生意気なウインク。

おれは机に学生鞆を放り投げ、目をつぶった。

「どうだかなあ」

授業中、おれの背中をつんつん、と触る感触があった。

お、来たか！ と思っただけど、後ろの席は関田典男という名前の
男が座っていたことをすぐに思い出す。

ため息を見られないようにしながら振り向く。

「なんだ？」

「高橋が消しゴム借りたと言って言うんだけど、俺は一つしか持って
いなくて。」

木暮、貸してあげてくれない？」

ほう。

おれは高橋希（たかはしのぞみ・16歳・バレーボール部所属・
ちょこつとカールした茶髪）を見た。笑顔で手を振り返してくる。

「おねがい」

いちおう授業中なので、口の形だけでそう伝えてきた。

「りょうかい」

と書いたメモを添えて、新品の消しゴムを渡す。

こういうときはけちけちなのがコツなのだ、とさっきからキ
ューピッドがうるさい。

メモもやつの進言だ。

もう一度背中をつつかれる。

「ありがとう」

メモの裏にはハートマークと一緒に短い言葉が添えられていた。

ね、僕の言ったとおりでしょう、みたいな視線を送るな、うざりたい。

「これが、俗に言うフラグ。ちなみに似たような単語だけど、フラッグメントはかけらという意味だから、混同しないように。砕け散っちゃうよ」

英語の授業で、やつは博識を披露している。

キューピッドも英語は必修科目なのだとか。

どんな世界なんだか。

「それで？」

「ここは自分から動かなきゃ！」

……ということだろうな。

男子のほうから動く、それは鉄則なのだとかキューピッドは主張する。

「具体的にはどうするんだ？」

自慢じゃないが告白なんてしたことはもちろん、されたこともな

い え？ そんなこと知っている？

「うぶ、だね」

「るせえ」

箱入り息子、さ。

なんだかんだで誘導されるがままに、下駄箱に手紙を入れ、放課後の体育館裏に呼び出してしまった。
やめときゃよかった。

「やあ、来たみたいだよ」

眺めのいいところからキューピッドが報告した。妙にニコニコしている。

他人の恋愛ほど楽しいものはないのだ。

だから芸能人の交際ニュースは週刊誌が常に狙っているし、修学旅行の夜は恋愛談議をすると決まっている。

おれの緊張は最高潮に達し、心臓が飛び出しそうなくらいに鼓動を刻んでいる。

大きく深呼吸。人の字を飲む込む。

知っている限りの対処法を施しても、収まる気配がない。

「なんなんだよ、いつたい」

誰に向かって不平を言っているのか。

きつとアドレナリンを生み出した神様に、だ。

「やつほー、ごくろうさん」

無駄に明るい笑顔で高橋が姿をあらわした。

どうしてそんなに気楽そうなんだ？ わけてくれ。

「あ うん、ようこそ」

ばか、という声が頭上から降ってくる。

我ながら醜態をさらしていることは、承知しているんだよ。くそ
う。

「いやはや。まさかこんな所に呼び出されるなんてねえ」

笑いながら高橋が歩みを進める。

彼女の髪が揺れるたびにおれの体が硬くなっていく。

ダイヤモンドのように、動かない。

「でもさあ、よくやるよね。今も屋上に凜子が呼び出されてさ、
すごい偶然って笑っちゃった」

さも楽しそうにわらう。

白い肌のラインがとても美しい。

体つきもよくて、出るところは出ている そんなことは関係ないけど。

「それで？ 聞くことだけ聞こうか」

おれの苦惱なんてまったく気にしていないかのように、高橋はおれの肩に手をかけた。

園崎嬢の思い出と重なり、そして輪郭が戻る。

「いけ！」

そんな応援も聞こえた。

おれは覚悟を振り絞る。

「おれと　つきあってください！」

耳が真っ赤になる。

高橋はちよつと照れくさそうな表情になった。

「はい。ごくりうさん」

……え？

「わかっていたつもりでも、面と向かって言われると恥ずかしいものだね。」

木暮のほうがかもつと恥ずかしいんだろうけどさ」

口を動かそうとしても、開かなかった。

おれはただ力尽きたように立ち尽くす。

「告白ゲームはおしまい。木暮もお疲れ様。何かの罰ゲーム？」

「……あ」

さいきん、クラスで流行しているものがある。

俗に言う、告白ゲームというやつだ。

超王道をつきすすまんと開発されたもので、展開はとにかくベタなものにこだわる。

下駄箱、屋上、夕日の中。

少女マンガをドラマ化したような。

そのせいか教室には参考用に、少女マンガの週刊誌が置いてある。男子赤面の、究極の罰ゲームだという評判だ。全体の半数くらいが餌食になっている。

高橋はそれと勘違いしたのだ。

……なんてこつたい。

「そつでしょ？」

何も言わないおれを見て、高橋がのぞきこんでくる。

これ以上耐えられるような心臓をおれは持ち合わせてはいなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1760i/>

ひとなつ

2010年10月9日01時52分発行